

レポートチェックリスト

チェックリストの使い方

- 卒業研究をはじめとし、レポートやポスターといった学術報告を提出する際に、作成したレポートやポスターがこのチェックリストの基準を満たしているのかをチェックする。
- このチェックリストの最終ページに日時と名前を記入する欄があるので、すべてのチェックを満たしたことを確認したら、確認日時と名前を記入する。
- 記入したチェックリストはレポートやポスターの提出時に合わせて提出する（詳しくは授業担当教員や正指導教員の指示に従うこと）。

全体・構成に関するチェック項目

☐ レポート・学術的知見の報告にふさわしい文体・文章表現で記述されている

- 口語表現（会話的表現）は避け、「である調」のような常体で記述している
- 体言止めや箇条書きを用いていない
- 無意味な改段落や冗長な1段落は避け、パラグラフライティング（1段落につき1つのメッセージとなるよう段落を構成）となっている
- 一人称（私、筆者など）を避ける
- すべての文章において主語と述語が明確になっている
- 誤字・脱字がない

☐ 定められた構成によってレポート・ポスターが作成されている

- レポートであれば、表紙、本文、引用文献を順序でレポートを構成し、本文には序論（または問題）、方法、結果、考察が含まれている
- ポスターであれば、題名、序論（または問題）、方法、結果、考察に対応する要素を含んでいる

☐ 時制を守っている

- 方法や結果などの執筆時点での過去の事実に関する言及は過去形になっている
- 考察においては結果の言及は過去形、考察については現在形になっている

☐ 剽窃（無断引用）を行っていない

- 出典を示さずに他の文献の文章を一部でも書き写した（コピペした）は「剽窃」にあたる。「剽窃」はカンニングなどと同様に不正行為にあたるため、相応のペナルティ（当該科目は不可となるなど）が与えられる

☐ 引用文献に関して以下の基準をすべて満たしている

- 言及した引用文献はすべて引用文献リストに掲載されている
- 引用文献リストに掲載された文献すべてが言及されている
- 文中で引用文献を適切な書式で掲載している（例. 小林, 2020; Kobayashi, 2020）
- 引用文献リストで引用文献を適切な書式で掲載している

序論に関するチェック項目

☐ 扱う研究テーマをわかりやすく説明している

- 専門家ではない者が読んで理解できるように専門用語について説明または定義すること
 - 例. 「〇〇効果とは…という現象であり…」, 「…において…することがある。これは〇〇と呼ばれており…」

☐ 研究の目的をわかりやすく説明している

- 「本研究は〇〇効果の…を明らかにするために行なわれた」「本研究の目的は、…を確認することであった」などと記載する
- ここで述べる研究目的の意義や重要性を説明することが序論の役割である
- ここまでに紹介した先行研究と対応させながら、記述するとよい

[] 実験・調査の概要をわかりやすく説明している（実験・調査研究の場合のみ）

- 「「まず、…を行ったあと、〇〇課題を実施した。」, 「…を行う△△群と、…を行う□□群の間で成績を比較した。」, 「大学生を対象として…を測定するための質問紙調査を行い、…」のように記述する
- 詳細については方法で述べるので、重要な情報のみを簡潔にまとめる

☐ 仮説や結果の予測についてわかりやすく説明している（仮説検証型研究の場合のみ）

- 仮説とは、ある現象や効果の背景にあるメカニズムについての説明である
- 予測とは、仮説に基づけば得られると期待される結果のパターンを指す
- 例えば、「もし、…であれば、△△群の課題成績は□□群よりも良いと予測される。」のうち、「もし、…」の部分が仮説にあたり、「△△群の課題成績は□□群よりも良い」が予測にあたる

方法に関するチェック項目

☐ 実験・調査の参加者の人数や必要な属性が記載されている

- 人数、年齢（平均、範囲、標準偏差）、性別は基本的には必須である
- その他、必要に応じて属性（例えば、視覚情報処理に関する実験であれば視力など）も記述する
- 参加者を除外した場合は、除外前的人数、除外後的人数、除外理由も記載する
- 可能であれば、サンプルサイズに関する事項（サンプルサイズ決定方法など）も記載する

☐ 条件や群の詳細が記載されている

- 条件や群を設けた場合は、どのような条件・群を設定したのかを記載する
- 各参加者を条件や群にどのように振り分けたのかを記載する

☐ 材料（刺激や質問紙）の詳細について記載している

- 視覚刺激であればサイズ、単語刺激であれば用いた単語などの詳細を記載する
- 質問紙であれば、どのような尺度構成（何因子で何項目で何件法なのか）や信頼性係数などを記載する
- 先行研究の刺激や質問紙を用いた場合は必ず引用する

☐ 参加者が行った課題及びに与えた教示を明確に説明している

- 参加者が行った課題の詳細（参加者が何をしよう求められたのかなど）を記載する
- 教示については全文をそのまま掲載するのではなく、要点を記載する方がよい場合も多い

- 参加者に何らかの反応を求めた場合にはどのような基準を設けたのか（「できるだけ速く」なのか，「できるだけ正確に」なのか）なども記載する

☐ 実施順（刺激系列）や試行数について記載している

- 刺激や質問紙をランダムに呈示したのか，それとも系統立てて呈示したのかといった呈示順番（刺激系列）を記載する
- 全体の試行数や条件に分かれている場合は条件別の試行数なども記載する
- 複数の条件や群を設けた場合は，カウンターバランスを取っていたのかを含め，条件や群の実施順についても記載する

☐ データをどのように集計・分析するのかを記載している

- 分析手法や代表値の計算方法などを記載する
- 実験であれば要因計画についても記載する

結果に関するチェック項目

☐ 表の形式は以下の基準をすべて満たしている

- 表で扱うデータを表すタイトルをつけ，表番号とタイトルは表の上に記載している（例. 表1 再認成績）
- 表の罫線として横線のみ（縦線なし）が表示されている
- 作成した表に関しては文中で「再認成績（表1）に対して分散分析～」などと文中で言及する

☐ 図の形式は以下の基準をすべて満たしている

- 図で扱うデータを表すタイトルをつけ，図番号とタイトルは図の上に記載している（例. 図1 再生成績）
- 縦軸と横軸に適切な軸名が表示されている
- エラーバーを設け，エラーバーが何を表すのかを記載している
 - 一般的にエラーバーは標準誤差または95%信頼区間とする
- 作成した図に関して，「再生成績（図1）に対して分散分析～」などと文中で言及する

☐ 同じデータを表と図の両方で示していない

- 1つのデータにつき，表か図のいずれかで十分である

☐ 主要な結果については文章で説明している

- 主要な結果については表や図を掲載した場合でも，表や図についても文章で説明する

☐ 各分析において，独立変数（説明変数）と従属変数（目的変数）を明示している

- 分散分析の場合は要因と水準についても記載する

☐ 相関，t検定，分散分析，（重）回帰分析などにおいて自由度，統計量，p値を掲載し，統計記号（例. t , r , p ）は斜体で示している

- できるだけ効果量（ η , d など）も掲載する。

☐ p値を数値で示している（.01以下または.001以下の場合を除く）

- p値は「 $p < .05$ 」や「 $p > .05$ 」といった不等号ではなく、値を記載する（例. $p = .03$ または $p = .003$ ）
- ただし、「 $p = .000001$ 」のように小数点以下の桁数が多い場合は、小数点第2位または第3位で四捨五入し、不等号（例. $p < .01$ または $pp < .001$ ）を記載する

☐ 数値は小数点以下の桁数を揃えている

- できるだけ、レポート内で小数点以下の数値の桁数は揃える
- 特に有効数字に注意すること（例えば、1.01でも1.00でも1となるため、1と1.00は必ずしも同等ではない）
- 基本的には、小数点以下の第2位または第3位までとするが、反応時間がミリ秒（ms）の場合は小数点以下の記載は不要である

☐ 多重比較や相関などが有意であった場合に、効果の方向を明示している

- t検定、多重比較、分散分析（水準が2つの場合）などでは、「A条件の方がB条件よりも有意に正答率が高かった」とのように効果の方向を明示して記載する
 - 「A条件とB条件に有意差があった」という報告では情報量が少ない
- 相関や重回帰分析においても「AとBに有意な相関があった」や「AとBに有意な関連があった」ではなく「AとBに有意な正の相関があった」などと効果の方向を明示して記載する

考察に関するチェック項目

☐ 冒頭で序論、方法について端的に振り返って述べている

- 序論で述べた目的や仮説、方法について振り返って端的に述べる
- ただし、以前の文章を再掲（コピペ）したり、冗長な文章にしない（目安としては10行以内）

☐ 主要な結果について端的にまとめた上で記述している

- 考察では、結果を「端的」を記述するため、詳細な分析結果（統計量やp値）などは基本的に記載しない
 - 例えば、t検定でA条件とB条件の記憶成績に有意な差があった場合でも、考察には「A条件の方がB条件よりも記憶成績が高かった」程度の記述とする

☐ 結果で示したデータについてのみ考察している

- 考察は結果で示した内容についてのみ扱う必要があるため、考察で述べたい場合は結果にも記載する

☐ 結果を解釈した上で考察している

- 分析結果をそのまま書くのではなく、分析結果が何を意味するのかを解釈を述べる
 - 例えば、「A条件とB条件の課題成績に有意な差があった」では結果を書いているだけにすぎないため、結果を解釈し、「A条件の方がB条件よりも課題成績が高く、これはA条件の〇〇という要因が課題成績を高めたと考えられる」などとすべきである

☐ 仮説・予測を設定した場合に、仮説・予測について端的に述べた上で分析結果を元に支持されたかどうかを判断している

- 仮説・予測を設定した場合は仮説・予測が支持されたかどうかを必ず考察する
 - 仮説が支持されたか、棄却されたのかを明示して記載する

☐ 仮説・予測が支持されなかった場合に、手続きに問題があったという考察のみとしていない

- 仮説・予測が支持されない場合でも、手続きの問題に帰する前に、仮説・予測が支持されなかったことがどのように解釈できるのかを記載する
 - 昨今の心理学における再現性問題が示唆するように、当該効果・現象がそもそも生じない可能性もある点に留意する

☐ 仮説・予測で扱っていない結果についても必要に応じて考察している

- 仮説・予測の対応を述べるだけでなく、仮説・予測以外に関しても興味深い結果があれば考察する

☐ 今後の展望や今後課題に関しては、なぜその検討が必要なのかを説明している

- 「今後、～を検討すべきである。」といった記述だけではなく、なぜ行うのかを説明する
- なお、「サンプルサイズを増やした再検討が必要」などと安易に記載しない（サンプルサイズを増やした検討を行う理由を説明するには一定の統計的知識が必要である）

最終確認

_____年_____月_____日

私_____は、提出するレポート・ポスターが上記すべてのチェック項目を満たしていることをたしかに確認しました。